

大正十一年九月助教となり、写真実習を担当。

因みに、以上のうち戸塚暢夫は製版科の、畑保之は臨時写真科の、久米福衛は西洋画科の卒業生である。

鎌田弥寿治の転任には臨時写真科の移管問題がからんでいた。それについて、彼は次のように記している。

帰朝した時「大正十一年四月」、東京芝浦には前述の官立東京高等工芸学校が、生れたばかりの瞬間であって、私は上野の美術学校にあった写真科の施設やら、専任の教職員等々の全部を引き具して芝浦の新校へ移る筈であったが、ここにまた一種のトラブルが起り、美校の写真科の代りに、美校に数年前から存在して居った製版科（この事に就いては後に述べる）を引^{（き）}を具して、新校芝浦に移り、私も新校の教授となり、芝浦校内には製版科の名を改めて、印刷工芸科という名によって独立した科が生れ、私はその科の科長を命ぜられた。

ただし、暗々の裏に、美校に残した写真科もやがて芝浦に引き取り、芝浦の印刷科と共に、芝浦で育成、永久に継続せしめることは、内々には決定して居ったのである。そして両三年遅れて、美校の写真科は芝浦の私の所に、その施設並びに職員等全部が移管されて来た。要するに予定通りに美校写真科は芝浦の東京高等工芸学校に移管されたのである。

（『日本写真教育史』鎌田弥寿治著。昭和五十年、東京写真大学短期大学部出版部）

これによって臨時写真科の移管をめぐる何らかのトラブルが生じ、移管にさき立って鎌田が転任したことがわかる。

その外に大正十一年八月には本校彫刻科教授畑正吉が、十一月には同金工科教授の神矢教親がともに新設校教授へと転任した。

⑦ 工芸部生徒成績展覧会

工芸部は大正十一年三月二十五、二十六、二十七日の三日間、卒業製作展覧会に合わせて第一回成績展覧会を開催し、授業成績の作品を展示した外、即売品を展示し、記念絵葉書を発行し、喫茶店を設けるなどして一般の観覧に供した。好評であったため、以後この催しは恒例となり、大正十三年春に震災の余波で休止した外は毎年開催した。第二回展では入場者約七千人、売約千六百円という盛況を呈し、毎年概ね同程度の成果をあげた。第三回展以降第七回展までは『東京美術学校校友会月報』にその概況報告が掲載されているが、それ以後は何ら記載が無いので廃止された模様である。

⑧ 津田信夫の在外研究

鑄造科教授、主任兼理事の津田信夫は大正十一年十月十三日に文部省より鑄造術および金工術研究のため満二年間アメリカ、フランス、イタリア在留を命ぜられ、翌十二年一月十八日に出発した。津田は明治八年十月二十三日に千葉県印旛郡佐倉町に生まれ、同三十三年本校鑄金科を卒業し、同研究科で学んだ後、同三十四年四月本校雇となった。以来助教（同三十五年一月）、教授（大正八年十一月）となり鑄造教育に尽くしただけでなく、本校依頼製作におけ

る製造部門において指導的役割を果たした。その昭和初期までの製作歴は次のとおりである。

・明治三四・五・一一 浜松町長依囑戦捷記念碑製作担任、宮城県昭忠会依囑昭忠碑製作担任

・同三五・一・三一 農商務省依囑第五回内国勸業博覧会附属水産館付設噴水銅像および水盤鑄造主任

・同同・一二・一 東京市役所依囑浅草公園噴水水器鑄造主任

・同三六・三・三〇 東京市役所依囑日比谷公園噴水器、アーク灯の造型および鑄造主任

同三七・六・一〇 大日本私立衛生会依囑ゼンナ氏銅像台座製作
方

・同同・一二・二二 井上はつ外二名依囑渡辺辰五郎銅像鑄造主任

・同三八・二・一三 文部省依囑帝国図書館裝飾パネル鑄造主任

・同同・七・七 西村勝三銅像鑄造主任

・同三九・二・二〇 故陸軍騎兵中尉長岡護全銅像鑄造主任

同四一・六・一九 東郷平八郎依囑故西郷、仁礼、河村三海將銅像鑄造工事監督

像鑄造工事監督

・同四三・五・七 東京市依囑改築日本橋上部鑄造裝飾物製作主任

・大正四・三・二九 戊辰勤王記念銅像建設委員会依囑故佐竹侯銅像鑄造工事担任

像鑄造工事担任

・同七・七・一〇 小沢明治依囑小野光景銅像鑄造担任

・昭和四・六・三〇 大蔵省依囑議院建築裝飾扉製作主任

・印は東京美術学校依囑製作事業の一環として行われたもの。

津田は製作の傍ら工芸に関する各種展覧会の審査委員もつとめ、

特に工芸の帝展参加運動において中心的役割を果たす。

西欧留学中の津田の足跡は『東京美術学校校友会月報』第二十二、二十三巻の「海外消息」欄に掲載されている津田書簡六通および本学芸術資料館所蔵正木直彦宛津田書簡などによってある程度まで辿ることができる。すなわち津田はマルセイユに上陸して大正十二年四月三日パリに到着。以後博物館見学などに日を送ったが、ドイツ、イギリス滞在追加が認められたので八月二日パリを出発して翌日ベルリンに着いた。それより南部ドイツのミュンヘン、アウグスブルグ、ウルム、フライドリッヒホーヘン、ポードンゼー湖、コンスタット、ステイユットガルド、マルボー、ルドヴィスブルグ、ハイデルベルク、フランクフルトを巡歴。八月二十五日有名な見本市を見るためにライプツヒヒに戻り、二十九日ベルリンに帰着した。さらに九月二日には北部ドイツの旅行に出発し、ハンブルクで日本の大地震の新聞記事を見て「大驚愕を喫」し、大使館で詳しい情報を得ようと同日六日ベルリンに戻ったが、詳細が得られず、ともかく一カ月後を待とうと中部ドイツ旅行に出発した。同月十四日ドレスデンへ行き、それよりライプツヒヒ、ワイマール、イエナ、ニュルンベルク、ラウテンブルク、ウールワブルク等を巡歴。再びフランクフルトに出てマインツに至り、ライン河を下ってホーンに上陸、ケルン、カッセルを経てノールトホーゼン、エラントを巡り、十月三日ベルリンに帰着。戦後のマルク大暴落、社会不安の続くドイツ国内の旅行は容易でなかったらしく、「呑氣者の小生も大に瘦せたる心持致候」と手紙に記している。

大正十二年十一月初旬パリに戻ってサロンドートンヌなどを見て

過ぎ、十二月初旬パリを出発、リヨンに二、三日滞在した後オランジュ、アヴィニョン、タラスコン、ニーム、ムーラン、アール、マルセーユ、フレージュス、サン・ラファエル、ニースを巡りモナコでクリスマスを過した。

同年十二月二十七日イタリアに入国、ゼノア、ピサを経て同月三十一日ローマ着。同地で正木直彦宛てに書いた手紙（大正十三年一月三日）には四月頃までの間にシンツリー島、ギリシャ、コンスタンチノープル、ハンガリー、オーストリア、チェコ、スイス、スペイン等を巡歴して五月中にパリに戻り春のサロンを見物してイギリスに渡る予定と記されている。

『東京美術学校校友会月報』第二十三巻第四号には津田がパリ滞在中に執筆した「日本工芸協会に望む」が掲載されている。これは翌十四年四月開催予定のパリ万国裝飾美術工芸博覧会へ出品する者のために西欧の芸術思潮を紹介し、日本の工芸美術のあり方を説き、発奮を促すためのものであった。

大正十三年七月初めに津田はロンドンへ移り、そこで上記博覧会囑託の通知を受けた。その後スペインを旅行し、十二月にパリに戻った。そこでは在外研究のために到着した同僚の田辺孝次と会い、一緒に見物し、また、デルスニスとも交流があった。

翌十四年三月八日、津田の留守宅が類焼を蒙り、工場のみ難を逃れた。また、この月、津田の滞欧期限も満期となった。しかし、彼は前記博覧会用務のためパリに留まった。同年四月二日の正木直彦宛津田書簡を見ると、津田はこの博覧会に対する日本側の処置、特に配慮を欠いた展示方法、自分に対する不当な待遇に憤激を抱いて

いたことがわかるが、ともかく用務を了えて同年十二月二十五日に帰国し、復職した。

⑨ 日仏交換美術展覧会

大正十一年四月から六月にかけて、日仏両国政府および民間篤志者の協力による日仏交換美術展覧会が開催された。即ち、パリではサロンの開期に合わせてシャンゼリゼー広場前美術館で日本美術展覧会（四月二十日～六月三十日）が、また、東京では農商務省商品陳列館でフランス現代美術展覧会（五月一日～同三十一日）が開かれたのであるが、新しい試みであったため、両方とも盛況を示した。この両展覧会については正木直彦、黒田清輝、久米桂一郎、和田英作、北浦大介その他本校職員たちが大いに尽力したので、その経緯を記す。

(一) 日本美術展覧会

大正十年五月（同月二十九日付『読売新聞』による）、フランス政府より日本美術展覧会開催の申し込みを受けた日本政府は、文部、外務両省管轄下に準備を進めることとし、本校の黒田清輝、正木直彦、久米桂一郎らにその任務を依頼。そこで彼ら首脳部は現代作家の日本画、西洋画、彫刻、工芸品と古美術品を出品することに決めた。出品勧誘に着手した。『東京美術学校校友会月報』第二十巻第五号を見ると、同年十一月十日に工芸美術会（本校内）は上野精養軒で全国工芸家大懇親会を開き、正木直彦と久米桂一郎の臨席を得て同展覧会に積極的に関与する方針を決めたという記事が掲載されており、出品勧誘が着々とすすめられたことがわかる。その結果、